

「ヒロシマ原爆の日」テレビ報道の分析

FCT メディア・リテラシー研究所
「ジェンダーとメディア」研究プロジェクト
登丸 あすか

○はじめに

パソコンやケータイといった新しいメディアが登場し、テレビは古いメディアとなりつつある。テレビを囲んで家族団欒の時間をもつことも少なくなり、自分の部屋のパソコンでメールのやり取りをしたり、新聞を読む代わりに通勤電車の中でケータイのニュースをチェックしたりするなど、メディアとの付き合い方も変わってきた。しかし、たとえパソコンやケータイなどのニューメディアが主流になり、テレビがオールドメディアになったとしても、パソコンを使ってインターネットの動画チャンネルやテレビの番組を見るなどして映像と接する機会が多い。むしろ、これからますます映像メディア中心の時代になるかもしれない。そう考えると、メディア・リテラシーを獲得する上で、映像分析の方法を学ぶことはこれまで以上に重要なことだと考えられる。

私たちは幼い頃からテレビと接していて、映像メディアの分析方法を知らなくても特に不都合はないように思える。では、映像メディアを分析することで一体何が見えてくるのだろうか。ここでは、映像メディアの分析方法の一例として2007年8月6日「ヒロシマ・原爆の日」のニュース分析の結果を報告する。

○ヒロシマ・原爆の日のニュース分析

8月は日本にとって特別な季節である。8月6日は広島に、9日は長崎に原爆が投下され、15日は日本が全面的に降伏して戦争が終わった日である。日本の8月は戦争や平和について考える季節であり、メディアでも大きく取り上げられる。新聞では特集が組まれ、テレビでは戦争や平和をテーマとするドキュメンタリーやドラマ、アニメが放送される。また8月6日には、広島市で平和記念式典が行われ、そこには多くの市民、日本の首相、海外からの来賓が参加する。その様子を日本の多くのメディアが取り上げ、年中行事のメディアイベントとなっている。オーディアンスはそうした報道を見ながら戦争や平和についての認識を深める。つまり、「ヒロシマ・原爆の日」は、日本のオーディアンスにとってメディアを通して戦争や平和について考える重要な契機といえる。では、テレビのニュース報道は「ヒロシマ・原爆の日」をどのように構成して、オーディアンスに提示しているのだろうか。ここでは2007年8月6日の「ヒロ

シマ・原爆の日」のニュース分析を通して考えてみたい。

分析の手順は、以下の通りである。

2007年8月6日の夕方の時間帯のニュース番組（NHK および主要民放4局：TBS、テレビ朝日、フジ、日本テレビ）を録画する。

録画したニュース番組の内容を書き出し、その中から「ヒロシマ・原爆の日」に関するニュース項目を取り出す。

「ヒロシマ・原爆の日」のニュース項目に登場する人物に焦点をあて、ジェンダー、年齢別に分類する。

○分析結果

分析対象とした夕方のニュース番組5番組のうち「ヒロシマ・原爆の日」のニュース（以下、「ヒロシマのニュース」とする）を取り上げたのは、表1で示したとおりTBS、日本テレビ、NHKの3番組で、テレビ朝日とフジテレビは取り上げていない。時間量をみると、TBSは3分46秒、日本テレビは5分21秒、NHKは4分3秒である。夕方のニュース番組における各ニュース項目の時間量は、1分以下のものが最も多く、長くても2分から3分である。それらと比較すると、ヒロシマのニュース項目はいずれも時間量が多く、取り上げた放送局はこのニュースを重視していることがわかる。

表1. 「ヒロシマ・原爆の日」を伝えるニュース報道

放送局	番組名	ニュースのタイトル	時間量
TBS	イブニングニュース	被爆62年 広島原爆の日	3分46秒
テレビ朝日	スーパーJチャンネル	—	
フジテレビ	スーパーニュース	—	
日本テレビ (NTV)	リアルタイム	広島市長『米の政策にノーを』アメリ リカ原爆投下容認教育の実態	5分21秒
NHK	ニュース7	被爆から62年 原爆の日	4分3秒

平和記念式典は、例年8月6日の8時に平和記念公園の原爆死没者慰霊碑の前で始まり、原爆が投下された8時15分には式典の参加者全員で黙祷が行われる。また、広島市長による平和宣言をはじめ、子どもたちや首相による平和への誓いや決意も述べられる。TBS、日本テレビ、NHKはいずれも平和記念式典の様子を伝える映像とともに、何人かのインタビューを取り上げている。また日本テレビは、それらの映像に加えて、米国での原爆に関する教育の実態も伝え

ている¹。

ヒロシマのニュースでは式典で宣言をする市長や首相、子どもたちをはじめ、参加した一般市民へのインタビューなど、実に多くの人物が登場する。ここでは、それらの人物をクローズアップされる人物、発言する人物の2つに分類して分析を行う。

クローズアップされる人物

テレビの映像では、クローズアップの技法がよく使われる。クローズアップの技法によって登場人物や対象物は画面に大きく映し出され、その表情や対象物の存在を強調することができる。例えば、登場人物の笑顔をクローズアップで映し出すことによって、登場人物のセリフやナレーションがなくても、喜ばしい出来事が起こったと伝えることができるのである。

表2は、ヒロシマのニュースでクローズアップによって映し出される人物を性別、年齢別に分類したものである。

表2. クローズアップされる人物の数：性別×年齢

	女性						男性					
	-10代	20代	30代	40代	50代	60代-	-10代	20代	30代	40代	50代	60代-
NHK	0	0	0	1	1	4	3	0	0	0	0	0
TBS	3	0	0	1	0	4	1	0	0	0	3	3
NTV	3	0	0	2	0	2	2	0	0	0	3	6
Total	6	0	0	4	1	10	6	0	0	0	6	9
	21						21					

クローズアップされる人物の数は、女性、男性ともに21人である。60代以上の項目をみると、女性10人、男性9人であり、他の年齢層と比べて最も多い。次に多いのは、10代以下の人物で、女性が6人、男性が6人と続く。ヒロシマのニュースでは、戦争を体験した人、あるいは被爆者やその遺族として式典に参列する高齢者の姿やその表情が何度も登場する。黙祷する人物や慰霊碑の前に祈る人物など、目を閉じていたり涙を流していたりする表情が多く映し出される。これは、戦争の悲惨さを象徴する映像として多用されていると考えられる。

¹ 日本テレビは米国の教育現場取材し、原爆投下を容認するような教育が行われていると報告している。広島市長の平和宣言にある「米国の政策にノーを」と訴える姿勢とは相反する現状として警鐘を鳴らしているが、この報告は米国のごく一部の教育現場取材するのみで米国全体の傾向を示すようなものとは言いがたい。

一方、ヒロシマのニュースには子どもも数多く登場し、親と一緒に黙祷する子どもの姿やその真剣な表情がクローズアップされている²。これらの子どもたちは、戦争の悲惨さを学び、将来を担う存在として登場していると考えられる。つまり、高齢者は戦争という「過去」を、子どもたちは「未来」を象徴する存在として大きく取り上げられているのである。

・発言する人物

テレビのニュースでは一般的に、街頭インタビューや著名人の会見など、発言する人物が数多く登場する。発言せずに登場する人物、つまり先述したクローズアップされる人物と比較すると、個人の意見や立場を自らの言葉で積極的に語っているようにみえる。しかし、その発言もまた、長いインタビューや会見の中からメディアが重要であると判断したものを選択した結果である。したがってメディアは、発言する人物の映像とその発言内容を用いて、取り上げる出来事に対する重要な意見や視点とは何かを示すのである。

では、ヒロシマのニュースではどのような人物の発言が取り上げられているのだろうか。すでに述べたとおり、ヒロシマのニュースでは広島市長や子どもたちの宣言など、式典会場で発言する人物が多く取り上げられ、式典に参加した一般の市民へのインタビューも加えられている。表 3 は、それらの発言する人物を性別、年齢別に分類した結果である。

表 3. 発言する人物の数：性別×年齢

	女性						男性					
	-10代	20代	30代	40代	50代	60代-	-10代	20代	30代	40代	50代	60代-
NHK	2	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	4
TBS	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	2	2
NTV	2	0	0	0	0	2	2	0	1	1	1	4
Total	4	0	0	1	0	5	3	0	1	1	4	10
	10						19					

表 3 から、発言する人物の数は、女性 10 人、男性 19 人であり、発言する男性の数は女性の約 2 倍と圧倒的に多い。年齢別にみると、60 代以上の女性 5 人、男性 10 人と最も多く、次いで、女性では 10 代以下の年齢層が 4 人、男性では 50 代が 4 人、10 代以下が 3 人である。ここでも、クローズアップされる人物と同様に、戦争体験者や遺族の発言として高齢者層が多く登場し、将来を担う子

² 女性で 40 代の人数が 4 人と比較的多いのは、子どもを連れた母親が多く登場している結果である。

どもたちの意見もまた重視されていることがわかる。とりわけ60代以上の男性の人数が10人と圧倒的に多く、50代も4人と比較的多い。これは、首相や市長など社会的地位の高い人物の発言がどのニュースでも使われ、重要視されている結果である。クローズアップされる人物では女性と男性の人数が同数であったが、発言する人物では年齢層の高い男性が数多く登場していて、戦争の悲惨さを訴えたり核の問題を指摘したりするなど、自らの立場や意見を明確に述べる役割は男性が担っていることがわかる。

メディアが伝えることと伝えていないこと

これまで見てきたように、「高齢者」は悲惨な戦争という「過去」を、また「子ども」は平和な「未来」を象徴する存在としてステレオタイプに表現されている。メディアは、過去の戦争を反省し平和な未来をつくることの重要性を非常にわかりやすく伝えているのである。

一方、あまり登場しない年齢層の人たちもいる。それは、20代から40代の比較的若い年齢層の人びとである。言い換えれば、「過去」と「未来」をつなぐ「現在」について語る人の存在が見えなくされているのである。ただし、誰も「現在」について語らないわけではない。広島市長や首相などの政治家は、現在の日本やヒロシマが果たすべき役割、そして他国への批判を述べている。つまり、社会的地位が高い一部の男性が政治の問題として「現在」を語っているのである。しかし、このような報道の仕方は、戦争や平和に関する現在の課題を政治や外交という狭い領域へ押し込めてしまう可能性をもつとも考えられる。オーディエンスに多様な視点を提示することがメディアの役割の一つであるならば、戦争の悲惨さを訴えるだけでなく、現在の課題をより広い文脈で捉えられるような報道が求められる。戦争体験者が高齢化し、戦争の悲惨さを伝えられる人が少なくなる中で、「現在」について年代や立場を超えて語り合うことが今後ますます必要となるだろう。